

III-111 土質材料構成方程式の多相混合物としての考察 Ⅱ

京都大学工学部 正員 足立 紀尚

序論

巨視的⁽¹⁾に於て土質材料は固(土粒子骨格), 液(間隙水), 気(空気)三相から成る混合物と考へられる。しかし、土質材料構成方程式の確立には各相間の相互作用を明らかにすることが大切である。今回は一固相と複数液相の混合物に対して、質量の交換と拡散が同時に生ずる場合の構成方程式の誘導と行おうが、主として Bowen⁽¹⁾の手法を用いる。質量交換と拡散現象が同時に生ずる場合⁽²⁾に於いて、2理想気相の混合物に対しては Dunwoody & Müller⁽²⁾が、Stokes 流相の混合物に対しては Ingram & Ewing⁽³⁾が、非⁽⁴⁾ニュートン⁽⁴⁾の弾性相の混合物に対しては Bowen⁽⁴⁾がそれぞれ構成方程式の誘導と行っている。しかし固相と液相の混合物に対するものは⁽⁵⁾見られぬ。質量交換と拡散が同時に生ずる場合を考へる理由は、粘性土に於ける吸着水と自由水、質量交換の Creep 現象の原因と考へることと、不飽和土に於ける溶解現象に及ぶ影響を考慮すべき美点と⁽⁶⁾なる。一方混合物の構成変数に密度勾配、変形勾配を加へることは最初 Müller⁽⁵⁾が 2 流相混合相理論で導入したものであるが、Korteweg⁽⁶⁾は古く 1901 年に表面張力の効果と表わす⁽⁷⁾に連続力学に導入している。先づ吸着水と自由水と相互作用に於いて、とくに吸着水の密度勾配は重要な役割を果たすと考へられるし、不飽和土に於いては表面張力の効果が大であることから土質材料構成方程式、変数に密度勾配、変形勾配を加へることは妥当と思う。

場方程式

昨年⁽⁷⁾ Truesdell⁽⁸⁾ と Müller⁽⁵⁾ の考へに基いて Green⁽⁷⁾ の客観性⁽⁷⁾の手法を応用して、エネルギー釣合式から場の方程式を求め、⁽⁹⁾ n 相の構成要素から成る混合物に対して Cartesian 座標を用いると

$$\frac{\partial}{\partial t} \zeta^{(a)} = 0, \quad \frac{\partial}{\partial t} m_i^{(a)} = 0, \quad \frac{\partial}{\partial t} M_{ij}^{(a)} = 0, \quad \frac{\partial}{\partial t} \zeta^{(e)} = 0 \quad (1)$$

各構成要素の釣合式は次のよう⁽¹⁰⁾に与えられる。

$$\begin{aligned} \rho \dot{\zeta}^{(a)} &= \frac{\partial}{\partial t} \rho^{(a)} + (\rho^{(a)} v_i^{(a)})_{,i} \\ \rho \dot{m}_i^{(a)} &= \rho \dot{c}^{(a)} u_i^{(a)} + \rho^{(a)} v_i^{(a)} - \rho^{(a)} b_i^{(a)} - T_{ij}^{(a)} \\ \rho \dot{M}_{ij}^{(a)} &= T_{ij}^{(a)} - \tau_{ij}^{(a)} \\ \rho \dot{\zeta}^{(e)} &= \rho \dot{c}^{(e)} \left(\epsilon^{(e)} + \frac{1}{2} u_i^{(e)} u_i^{(e)} \right) + \rho m_i^{(a)} u_i^{(a)} + \rho \dot{\zeta}^{(a)} - \rho \dot{c}^{(a)} u_i^{(a)} u_i^{(a)} - T_{ij}^{(a)} v_{ij}^{(a)} - \kappa_{i,i}^{(e)} - \rho^{(e)} r^{(e)} \end{aligned} \quad (2)$$

混合物全体に対して成立する⁽¹¹⁾という Truesdell の考へに基いて、エントロピー⁽¹²⁾の不等式は

$$\sum_a \rho \dot{\zeta}^{(a)} = \sum_a \left[\rho^{(a)} \dot{\zeta}^{(a)} + \rho \dot{c}^{(a)} \left(\frac{\rho^{(a)}}{\rho} \right)_{,i} - \frac{\rho^{(a)} v_i^{(a)}}{\rho} \right] \geq 0 \quad (3)$$

で与えられる。ここで $\zeta^{(a)}$ は質量、 $m_i^{(a)}$ は運動量、 $M_{ij}^{(a)}$ は角運動量、 $\zeta^{(e)}$ はエネルギー、 $\dot{\zeta}^{(a)}$ はエントロピーの a -構成要素に対する増分であり、 $\rho^{(a)}$ は密度、 $u_i^{(a)}$ は速度、 $u_i^{(e)}$ は拡散速度、 $b_i^{(a)}$ は外力、 $T_{ij}^{(a)}$ は応力成分、 $\epsilon^{(e)}$ は内部エネルギー、 $\kappa_i^{(e)}$ は加熱流入量、 $r^{(e)}$ は放射による物相加熱、 $\rho^{(e)}$ はエントロピー、 $\theta^{(e)}$ は温度を表わしている。それらの間には次の関係式が成立する。

$$u_i^{(a)} = v_i^{(a)} - v_i, \quad p v_i = \frac{p}{\rho} \rho^{(a)} v_i^{(a)}, \quad p = \sum \rho^{(a)}, \quad \left(\frac{p}{\rho}\right) = \frac{\sum \rho^{(a)} v_i^{(a)}}{\sum \rho^{(a)}} \quad (4)$$

次に Bowen⁽¹⁾ が用いた Massieu 関数と coldness を導入する。

$$\begin{aligned} \Delta^{(a)} &= \rho^{(a)} \left(\eta^{(a)} - \frac{\varepsilon^{(a)}}{\rho^{(a)}} \right) && \text{Massieu の関数} \\ \theta^{(a)} &= \frac{1}{\rho^{(a)}} && \text{coldness} \end{aligned} \quad (5)$$

Massieu 関数は Helmholtz の自由エネルギー $-A^{(a)}$ と次の関係がある。

$$\Delta^{(a)} = -\rho^{(a)} \theta^{(a)} A^{(a)} \quad (6)$$

(5) 式を (3) 式に代入すると $\rho^{(a)} > 0$ として、エントロピー不等式の次式で与えられる。

$$\sum \left\{ \Delta^{(a)} + \rho^{(a)} \theta^{(a)} \left(\Delta^{(a)} \delta_{ij} + \theta^{(a)} T_{ij}^{(a)} \right) v_{ij}^{(a)} - k_i^{(a)} \theta_i^{(a)} + \rho \theta^{(a)} \dot{\varepsilon}^{(a)} + \frac{1}{2} \rho \theta^{(a)} \dot{u}_i^{(a)} u_i^{(a)} - \rho \theta^{(a)} \dot{m}_i^{(a)} u_i^{(a)} \right\} \geq 0 \quad (7)$$

この不等式は混合体としては単一相として運動するという Truesdell の考え方に従って、混合体全体の各構成要素の応力、内部エネルギー、加熱流入量などの関係式を求めて固定して考之べからば、現在より $\rho^{(a)} > 0$ のエントロピー不等式を矛盾なく説明できるであろう。ここで導入せずに議論する。この点に関して Green & Naghdi⁽²⁾ はくわしく、混合体理論の論争の一つである。

構成方程式

土質材料を一つの固相(土粒子骨格)と複数の流体の混合体と考之、構成方程式を誘導する。まず、各構成要素の $T_{ij}^{(a)}$, $\delta_i^{(a)}$, $\varepsilon^{(a)}$, $\Delta^{(a)}$, $k_i^{(a)}$, $r^{(a)}$, $\dot{\varepsilon}^{(a)}$, $\dot{m}_i^{(a)}$, $\dot{u}_i^{(a)}$ と $\dot{\varepsilon}^{(a)}$ は構成要素の運動と温度 $\theta^{(a)}$ によって決定されるが、これらは釣合式(1),(2)と不等式(7)と常に満足し、かつ素不依存であることが要求される。しかし $\delta_i^{(a)}$, $r^{(a)}$, $\dot{m}_i^{(a)}$ は(2)式において他の諸量の求むれば決定されるので、当初から考慮する必要はなく、結局 $T_{ij}^{(a)}$, $\varepsilon^{(a)}$, $\Delta^{(a)}$, $k_i^{(a)}$, $\dot{\varepsilon}^{(a)}$, $\dot{m}_i^{(a)}$, $\dot{u}_i^{(a)}$ が $x_i^{(a)}$, $\rho^{(a)}$, $\theta^{(a)}$ ($\rho = 1, \dots, n$) の関数として表わされると考之る。すなわち

$$(T_{ij}^{(a)}, \varepsilon^{(a)}, \Delta^{(a)}, k_i^{(a)}, \dot{\varepsilon}^{(a)}, \dot{m}_i^{(a)}, \dot{u}_i^{(a)}) = f(x_i^{(a)}, \rho^{(a)}, \theta^{(a)}) \quad (8)$$

この式はありとあらゆる一般性であるから、ここでは一相の固相と $n-1$ 相の流体の混合体の n 個の独立変数に依存するようであるとして仮定する。

$$\rho^{(a)}, x_i^{(a)}, \rho^{(b)}, x_i^{(b)}, N_{ij}^{(a)}, N_{ij}^{(b)}, \theta^{(a)}, \theta^{(b)} \quad (\rho = 1, \dots, n, \quad i = 1, \dots, n) \quad (9)$$

ここで密度勾配 $\rho^{(a)}$ と変形勾配 $x_i^{(a)}$ を導入したのは先述のとおり、粘性土の場合に与える吸着水の問題や不飽和土に与える表面張力の問題を考之るとより重要であると考之るから Korteweg や Müller の概念を導入した。質量の交換 $\dot{\varepsilon}^{(a)}$ については、より具体的に考之るがここでは「 $\rho^{(a)}$ 」が、例之ば、粘性土に与える二次圧密の現象は外部作用 $\rho^{(a)}$ によって吸着水と自由水間非平衡状態が生じ(不安定な密度勾配に依る)その結果吸着水から自由水へ質量交換が生ずるのでは「 $\rho^{(a)}$ 」と考之てゐる。その過程に速度過程理論⁽³⁾の適用で与えることがわるとより具体的に考之るであろう。不飽和土に与える空気中の水への溶解は力学特性に多大の効果を与えるので無視できない。イオン交換も質量交換の一つである。これらから土質材料を混合体と考之る時に密度勾配、変形勾配を独立変数に加え、質量の相互作用を考慮すべきである理由である。むしろ、ここで選んだ独立変数は限られるものであり、理論そのものは特別なものであることは当然である。しかし逆に不飽和土の独立変数に平等に依存するという保証もない。今一つ重要なことは equipresence

の原理を用いるが、このことは各構成要素に特有の固相、流相としての性質が他の構成要素、さらに混合相全体に影響するという仮定に相当する。この原理の価値を含めて上記のことは実験的に検証する以外に方法はないことは自明である。この事は Dunwoody⁽⁹⁾も述べているように混合相理論の未解決の問題の一つである。

問題を簡単にするため、一方向性固相と複数個の単純な流相の混合相があると仮定すると、material frame indifference と等方性、仮定から (9) 式の変数は次のように限定されることとなる。

$$p^{(\beta)}, c_{ij}^{(\beta)}, \rho_{i,\alpha}^{(\beta)}, K_{ijk}^{(\beta)}, D_{ij}^{(\beta)}, w_{ij}^{(\beta_2)}, v_i^{(\beta_1)}, \theta^{(\beta)}, \theta_{i,\alpha}^{(\beta)} \quad (\beta=2, \dots, n, \delta=2, \dots, m) \quad (10)$$

$$\begin{aligned} \Rightarrow K_{ij}^{(\beta)} &= z_{ijA}^{(\beta)} z_{ijA}^{(\beta)}, \quad K_{ijk}^{(\beta)} = x_{i,AD} X_{AD}^{(\beta)} X_{B,ik}^{(\beta)}, \quad D_{ij}^{(\beta)} = \frac{1}{2}(u_{ij}^{(\beta_1)} + u_{ji}^{(\beta_1)}) \\ w_{ij}^{(\beta_2)} &= \frac{1}{2}(w_{ij}^{(\beta_2)} - w_{ji}^{(\beta_2)}) - \frac{1}{2}(v_{ij}^{(\beta_2)} - v_{ji}^{(\beta_2)}), \quad v_i^{(\beta_1)} = v_i^{(\beta_1)} - v_i^{(\beta_1)} \end{aligned} \quad (11)$$

系不依存性から、速度場と spin Tensor は二構成要素の相対的体積を用いるべきことが結論づけられるから、速度場は単一構成要素、すなわち固相に対する相対速度 $v_i^{(\beta_1)}$ を、spin Tensor は流相相対であるから、単一構成要素、例えば吸着水相に対する相対的体積を考へる、 $w_{ij}^{(\beta_2)}$ 。これらから、この混合相に対する構成方程式は次のように与えられる。

$$\begin{aligned} T_{ij}^{(\alpha)} &= T_{ij}^{(\alpha)}(p^{(\alpha)}, c_{ij}^{(\alpha)}, \rho_{i,\alpha}^{(\alpha)}, K_{ijk}^{(\alpha)}, D_{ij}^{(\alpha)}, w_{ij}^{(\beta_2)}, v_i^{(\beta_1)}, \theta^{(\alpha)}, \theta_{i,\alpha}^{(\alpha)}) \\ \mathcal{L}^{(\alpha)} &= \mathcal{L}^{(\alpha)}(p^{(\alpha)}, c_{ij}^{(\alpha)}, \rho_{i,\alpha}^{(\alpha)}, K_{ijk}^{(\alpha)}, D_{ij}^{(\alpha)}, w_{ij}^{(\beta_2)}, v_i^{(\beta_1)}, \theta^{(\alpha)}, \theta_{i,\alpha}^{(\alpha)}) \end{aligned} \quad (12)$$

これらの構成方程式はエントロピー不等式 (7) に満足しなければならない、すなわち (1) 式から制約を受けることとなる。関係式

$$(\dot{\rho}^{(\alpha)})^{(w)} = \dot{\rho}^{(\alpha)} + \rho_{i,\alpha}^{(\alpha)}(v_i^{(w)} - v_i^{(\alpha)}) \quad (13)$$

を用いて $\mathcal{L}^{(\alpha)}$ に計算 (7) 式を代入した後、 $\mathcal{L} = \sum_{\alpha} \mathcal{L}^{(\alpha)}$ の関係を導入すると

$$\begin{aligned} & \sum_{\alpha} \left[\frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \theta^{(\alpha)}} + \rho^{(\alpha)} \varepsilon^{(\alpha)} \right] \dot{\theta}^{(\alpha)} + \sum_{\alpha} \left[\sum_{\beta} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \theta_{i,\alpha}^{(\beta)}} (v_i^{(\beta)} - v_i^{(\alpha)}) - v_i^{(\alpha)} \right] \dot{\theta}_{i,\alpha}^{(\alpha)} + \sum_{\alpha} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \theta_{i,\alpha}^{(\alpha)}} \dot{\theta}_{i,\alpha}^{(\alpha)} + \sum_{\alpha} \sum_{\beta} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \theta_{i,\alpha}^{(\beta)}} \dot{\theta}_{i,\alpha}^{(\beta)} (v_i^{(\beta)} - v_i^{(\alpha)}) \\ & + \sum_{\alpha} \rho^{(\alpha)} \left(\dot{c}^{(\alpha)} + \frac{1}{2} \dot{c}^{(\alpha)} v_i^{(\alpha)} v_i^{(\alpha)} - v_i^{(\alpha)} \dot{c}^{(\alpha)} \right) + \sum_{\alpha} \left[(v_i^{(\alpha)} \dot{v}_j^{(\alpha)} + \theta^{(\alpha)} \dot{v}_j^{(\alpha)}) v_{ij}^{(\alpha)} + \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \rho_{i,\alpha}^{(\alpha)}} \dot{\rho}_{i,\alpha}^{(\alpha)} + \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial c_{ij}^{(\alpha)}} \dot{c}_{ij}^{(\alpha)} \right. \\ & + \sum_{\alpha} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial v_i^{(\alpha)}} \left[v_{ij}^{(\alpha)} (v_j^{(\alpha)} - v_j^{(\alpha)}) - v_{ij}^{(\alpha)} v_j^{(\alpha)} \right] \left. \right] + \sum_{\alpha} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial D_{ij}^{(\alpha)}} \dot{D}_{ij}^{(\alpha)} + \sum_{\alpha} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial w_{ij}^{(\beta_2)}} \dot{w}_{ij}^{(\beta_2)} + \sum_{\alpha} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial v_i^{(\beta_1)}} \dot{v}_i^{(\beta_1)} \\ & + \sum_{\alpha} \sum_{\beta} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial w_{ij}^{(\beta_2)}} w_{ij,k}^{(\beta_2)} v_k^{(\alpha)} - \sum_{\alpha} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial w_{ij,k}^{(\beta_2)}} [v_k^{(\beta_1)} w_{ij,k}^{(\beta_2)} + w_{ij,k}^{(\beta_2)} (v_k^{(\beta_1)} - v_k^{(\alpha)})] + \sum_{\alpha} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \rho_{i,\alpha}^{(\alpha)}} \dot{\rho}_{i,\alpha}^{(\alpha)} + \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial K_{ijk}^{(\alpha)}} \dot{K}_{ijk}^{(\alpha)} \\ & + \sum_{\alpha} \sum_{\beta} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \rho_{i,\alpha}^{(\beta)}} \rho_{i,\alpha}^{(\beta)} (v_i^{(\alpha)} - v_i^{(\alpha)}) + \sum_{\alpha} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial c_{ij}^{(\alpha)}} c_{ij,k}^{(\alpha)} (v_k^{(\alpha)} - v_k^{(\alpha)}) + \sum_{\alpha} \left[\sum_{\beta} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \rho_{i,\alpha}^{(\beta)}} \rho_{i,\alpha}^{(\beta)} (v_j^{(\beta)} - v_j^{(\alpha)}) + \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial K_{ijk}^{(\alpha)}} K_{ijk,l}^{(\alpha)} (v_l^{(\alpha)} - v_l^{(\alpha)}) \right] \geq 0 \end{aligned} \quad (14)$$

この変数の逆方向から (14) 式は $\dot{\rho}_{i,\alpha}^{(\alpha)}, \dot{\rho}_{i,\alpha}^{(\beta)}, \dot{K}_{ijk}^{(\alpha)}, \dot{K}_{ijk,l}^{(\alpha)}, \dot{D}_{ij}^{(\alpha)}, \dot{D}_{ij,k}^{(\alpha)}, \dot{w}_{ij}^{(\beta_2)}, \dot{v}_i^{(\beta_1)}, \dot{\theta}^{(\alpha)}, \dot{\theta}_{i,\alpha}^{(\alpha)}$ の任意の値に対して必ず成り立つべきであるから次の結論を得られる。

$$\begin{aligned} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \theta^{(\alpha)}} + \rho^{(\alpha)} \varepsilon^{(\alpha)} = 0, \quad \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \theta_{i,\alpha}^{(\alpha)}} = 0, \quad \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \rho_{i,\alpha}^{(\beta)}} = 0, \quad \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial K_{ijk}^{(\alpha)}} = 0, \quad \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial D_{ij}^{(\alpha)}} = 0, \quad \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial w_{ij}^{(\beta_2)}} = 0, \quad \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial v_i^{(\beta_1)}} = 0 \\ \sum_{\alpha} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \rho_{i,\alpha}^{(\alpha)}} v_j^{(\alpha)} + \sum_{\alpha} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \rho_{i,\alpha}^{(\beta)}} v_i^{(\alpha)} = 0, \quad \sum_{\alpha} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \rho_{i,\alpha}^{(\beta)}} v_j^{(\alpha)} + \sum_{\alpha} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \rho_{i,\alpha}^{(\alpha)}} v_i^{(\alpha)} = 0 \end{aligned} \quad (15)$$

また変数 $\dot{D}_{ij,k}^{(\alpha)}, \dot{w}_{ij,k}^{(\beta_2)}, \dot{K}_{ijk,l}^{(\alpha)}$ に対して次式が満足されることは明らかである。

$$\sum_{\alpha} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial D_{ij}^{(\alpha)}} v_k^{(\alpha)} D_{ij,k}^{(\alpha)} = 0, \quad \sum_{\alpha} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial w_{ij,k}^{(\beta_2)}} v_l^{(\alpha)} w_{ij,k}^{(\beta_2)} = 0, \quad \sum_{\alpha} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial K_{ijk}^{(\alpha)}} v_l^{(\alpha)} K_{ijk,l}^{(\alpha)} = 0 \quad (16)$$

(15), (16) 式を (4) 式に用いると不等式は

$$\begin{aligned} & \sum_{\alpha} \left[\sum_{\beta} \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial \theta^{(\alpha)}} (v_{\alpha}^{(\beta)} - v_{\alpha}^{(\alpha)}) - R_{\alpha}^{(\alpha)} \right] \theta_{\alpha}^{(\alpha)} + \sum_{\alpha} \rho \theta^{(\alpha)} \left(\dot{e}^{(\alpha)} + \frac{1}{2} \dot{e}^{(\alpha)} v_{\alpha}^{(\alpha)} v_{\alpha}^{(\alpha)} - m_{\alpha}^{(\alpha)} v_{\alpha}^{(\alpha)} \right) \\ & + \sum_{\alpha} \left[(v_{\alpha}^{(\alpha)} \delta_{ij} + \theta^{(\alpha)} T_{ij}^{(\alpha)}) v_{\alpha}^{(\alpha)} + \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial p^{(\alpha)}} \dot{p}^{(\alpha)} + \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial c_{ij}^{(\alpha)}} \dot{c}_{ij}^{(\alpha)} + \sum_{\gamma=2}^n \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial \theta^{(\gamma)}} v_{\alpha}^{(\gamma)} v_{\alpha}^{(\gamma)} \right] + \sum_{\alpha} \sum_{\beta} \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial p^{(\beta)}} p_{\alpha}^{(\beta)} (v_{\alpha}^{(\beta)} - v_{\alpha}^{(\alpha)}) \\ & + \sum_{\alpha} \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial c_{ij}^{(\alpha)}} (c_{ij}^{(\alpha)})_k (v_{\alpha}^{(\alpha)} - v_{\alpha}^{(\beta)}) \geq 0 \end{aligned} \quad (17)$$

さらに関係式 $\dot{p}^{(\alpha)} = \rho \dot{e}^{(\alpha)} - \rho^{(\alpha)} v_{\alpha}^{(\alpha)} \delta_{ij}$ と $\dot{c}_{ij}^{(\alpha)} = 2 v_{\alpha}^{(\alpha)} c_{ij}^{(\alpha)}$ を代入して計算を進めると関係式は相対的に分離した式が求まる。

$$\begin{aligned} & - \sum_{\alpha} R_{\alpha}^{(\alpha)} \theta_{\alpha}^{(\alpha)} + \left[\sum_{\beta} \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial \theta^{(\beta)}} \theta_{\alpha}^{(\beta)} - \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial \theta^{(\alpha)}} \theta_{\alpha}^{(\alpha)} + \sum_{\beta} \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial p^{(\beta)}} p_{\alpha}^{(\beta)} - \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial p^{(\alpha)}} p_{\alpha}^{(\alpha)} + \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial c_{jk}^{(\alpha)}} c_{jk}^{(\alpha)} - \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial c_{jk}^{(\alpha)}} c_{jk}^{(\alpha)} - \rho \theta^{(\alpha)} m_{\alpha}^{(\alpha)} \right] v_{\alpha}^{(\alpha)} \\ & + \sum_{\alpha} \left[\sum_{\beta} \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial p^{(\beta)}} \theta_{\alpha}^{(\beta)} - \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial \theta^{(\alpha)}} \theta_{\alpha}^{(\alpha)} + \sum_{\beta} \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial p^{(\beta)}} p_{\alpha}^{(\beta)} - \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial p^{(\alpha)}} p_{\alpha}^{(\alpha)} + \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial c_{jk}^{(\alpha)}} c_{jk}^{(\alpha)} - \rho \theta^{(\alpha)} m_{\alpha}^{(\alpha)} \right] v_{\alpha}^{(\alpha)} \\ & + \sum_{\alpha} \rho \theta^{(\alpha)} \left(\dot{e}^{(\alpha)} + \left(\frac{1}{\rho} \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial p^{(\alpha)}} + \frac{1}{2} v_{\alpha}^{(\alpha)} v_{\alpha}^{(\alpha)} \right) \dot{e}^{(\alpha)} \right) + \left[(v_{\alpha}^{(\alpha)} \delta_{ij} + \theta^{(\alpha)} T_{ij}^{(\alpha)}) - \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial p^{(\alpha)}} \rho^{(\alpha)} \delta_{ij} + \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial c_{jk}^{(\alpha)}} c_{jk}^{(\alpha)} - \sum_{\alpha} \sum_{\beta} \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial \theta^{(\beta)}} v_{\alpha}^{(\beta)} \right] v_{\alpha}^{(\alpha)} \\ & + \sum_{\alpha} \left[(v_{\alpha}^{(\alpha)} \delta_{ij} + \theta^{(\alpha)} T_{ij}^{(\alpha)}) - \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial p^{(\alpha)}} \rho^{(\alpha)} \delta_{ij} + \sum_{\alpha} \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial \theta^{(\alpha)}} v_{\alpha}^{(\alpha)} \right] v_{\alpha}^{(\alpha)} \geq 0 \end{aligned} \quad (18)$$

(15) 式から直ちに次の結論が求まる

$$\begin{aligned} \mathcal{L} &= \mathcal{L}(\rho^{(\alpha)}, c_{ij}^{(\alpha)}, \theta^{(\alpha)}) - \sum_{\alpha} \mathcal{L}^{(\alpha)} \\ \dot{e}^{(\alpha)} &= - \frac{1}{\rho} \frac{\partial \mathcal{L}}{\partial \theta^{(\alpha)}} = \dot{e}^{(\alpha)}(\rho^{(\alpha)}, c_{ij}^{(\alpha)}, \theta^{(\alpha)}) \end{aligned} \quad (19)$$

(2) 式により変数の選び方によって、関係相対変形速度 $v_{ij}^{(\alpha)}$ に依存しないと仮定する。このことは関係相対弾性体であることを意味する。したがって不等式 (19) の最後から二項目の $v_{ij}^{(\alpha)}$ の任意の値に対して (19) 式が常に成立する必要があることから、関係相対する応力 $T_{ij}^{(\alpha)}$ は次のように求まる。

$$T_{ij}^{(\alpha)} = \frac{1}{\theta^{(\alpha)}} \left[- \mathcal{L}^{(\alpha)}_{,ij} + \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial p^{(\alpha)}} \rho^{(\alpha)} \delta_{ij} - \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial c_{jk}^{(\alpha)}} c_{jk}^{(\alpha)} + \sum_{\alpha} \sum_{\beta} \frac{\partial \mathcal{L}^{(\alpha)}}{\partial \theta^{(\beta)}} v_{\alpha}^{(\beta)} \right] \quad (20)$$

すなわち応力は \mathcal{L} と (15), (16) 式と満足するよう選ぶから $\mathcal{L}^{(\alpha)}$ と等しいと仮定する。一方関係相対する応力 $T_{ij}^{(\alpha)}$ は \mathcal{L} と $\mathcal{L}^{(\alpha)}$ とは $\theta^{(\alpha)}$ の $T_{ij}^{(\alpha)}$ と等しい (19) 式と満足するよう仮定して決定すべきで、これは $\dot{e}^{(\alpha)}$, $m_{\alpha}^{(\alpha)}$ とは具体的な材料数値と等しいと仮定して議論する。

参考文献

- (1) R. M. Bowen & D. J. Garcia, (1970), *Int. J. Eng. Sci.*, Vol. 8, pp. 63-83
- (2) N. T. Dunwoody & I. Müller, (1968), *Arch. Rat. Mech. Anal.*, Vol. 29, pp. 384-369
- (3) J. D. Ingram & A. C. Eringen, (1967), *Int. J. Eng. Sci.*, Vol. 5, pp. 209-222
- (4) R. M. Bowen, (1969), *Arch. Rat. Mech. Anal.*, Vol. 34, pp. 97-127
- (5) I. Müller, (1968), *Arch. Rat. Mech. Anal.*, Vol. 28, pp. 1-39
- (6) C. Truesdell & W. Noll, (1965), *Handbuch der Physik III/3*, Springer, pp. 513-515
- (7) 足立紀尚, (1970), 土木学会第25回年次学術講演会講演集第3部, pp. 73-76
- (8) A. E. Green & P. M. Naghdi, (1969), *Quart. J. Mech. Appl. Math.*, Vol. 22, pp. 427-438
- (9) N. T. Dunwoody (1970), *Arch. Rat. Mech. Anal.*, Vol. 38, pp. 349-371
- (10) W. Noll, (1955), *J. Rat. Mech. Anal.*, Vol. 1, pp. 3-80.